

平成22年 4月 8日現在

研究種目： 基盤研究（B）
 研究期間： 2007～2009
 課題番号： 19320044
 研究課題名（和文） 翻訳と文化横断性についての総合的研究——翻訳の言語態を継承しつつ
 研究課題名（英文） Comprehensive Studies of Translation and Cultural Diversity
 研究代表者
 湯浅 博雄（YUASA HIROO）
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授
 研究者番号： 30130842

研究成果の概要（和文）：われわれの生きている言語・文化・社会は複数性を前提にしている。他なる言語・文化・社会を受け入れ、相互に理解し、認め合うためには、翻訳という過程を（たんなる手段とみなすのではなく）他者との関係における最も重要な運動と考える必要がある。翻訳は諸言語・文化の多様性を横断しようとするが、その横断の運動は言語活動のもつ本性に即して実践されるのであり、横断は終わることがなく、絶えず新たな（横断の）運動になるだろう。この見解を、現代の文学や思想を読解するなかで検証した。

研究成果の概要（英文）：It is self-evident that we have various languages, cultures and societies. In order to understand, acknowledge and accept their differences, it is necessary to regard translation as the most important activity in the relation with the other. Translation goes across diverse languages and cultures, and this is based on the intrinsic nature of language itself. Translation never ceases and it will keep generating new activities of translation. We have examined such a view by reading contemporary literature and philosophy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2008年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2009年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
年度			
年度			
総計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：フランス文学・思想、言語態研究

科研費の分科・細目：人文学、ヨーロッパ文学

キーワード：翻訳、言語態、異文化交流、間文化、他者理解、テキスト性

1. 研究開始当初の背景

（1）2004年から2006年にかけて、

科学研究費補助金基盤（B）の支援を受けつつ、「翻訳の言語態」研究を遂行してきた。

（2）現代世界はポスト・コロニアル的な状況にあるが、その状況のなかで、複数の言語・文化が相互に他者を受け入れ、理解するためには、言語・文化を横断するものを探究する必要があり、それは翻訳の過程を当然のものとして要請する。

（3）したがって、翻訳の言語態的な研究と文化横断性をつなぐ探究が求められていた。そういう事情を背景にして、本プロジェクト研究は開始された。

2. 研究の目的

（1）私たちが各々のラング（母語）を源泉とし、それに基づいて生き、語り、思考しながらも、他者（他なる言語・文化、異なる宗教・習俗・社会）を理解し、受け止め、相互に認め合っていくためには、なにが必要であろうか。それはまず、諸々の言語の複数性を引き受けなければならないということである。

（2）そのためには、なんらかの「翻訳」の必然性を受け入れ、その可能性を探り、掘り下げていくことが求められるであろう。翻訳という営為は、諸言語・文化・共同体の差異のあいだを媒介し、可能な限り横断していく運動として考えられるだろう。

（3）多言語的状況におかれた文学作品に注目して、異なる言語、文化間を横断する可能性を示すテキストの様態を深く検証することが重要になってくる。

（4）ルネッサンス期や国民国家成立期における他なる言語・文化との接触、混淆がもたらした状況の重要性を考察する。また現代のベケットやクンデラ、カリブ海諸島の作家たちにおける文学創造、新文化の探究の情勢を、翻訳の問題系に応じて究明する。

（5）現代フランスの思想家デリダの翻訳思想は、ソシュールの言語論、ベンヤミンの「翻訳者の使命」を深く読み込んだうえでさらに大きく展開しているが、このデリダの思想を、ベルマンの『異邦なるものの試練』などとも関連させながら追求する。

3. 研究の方法

（1）第1の課題、つまり複数の言語がクロス・オーバーする文化的状況のなかにある文学や思想のあり方を歴史軸に沿って検討する作業を、できるだけ幅広く、網羅的に遂行するという課題に取り組む。まずルネッサンスおよび初期古典主義の領域に関しては、宮下が主に担当し、ラブレの『ガルガンチュアとパンタグリユエル』全四巻の翻訳およびモンテーニュ『エッセー』の翻訳など通じて具体的な事例の考察を行う。

（2）ドイツ・ロマン派における翻訳と詩的言語の変革をめぐる、青木、鍛冶、湯浅が担当して研究を進める。これまでの研究成果を継承しつつ、翻訳にともなう本質的な問題点の解明が中心となる。ドイツ・ロマン派の詩人・思想家ヘルダーリンは、ソフォクレスの『アンティゴネー』を翻訳しながら、原作

（ギリシア語）特有の言い回し、固有語法を尊重しつつ、それを自らの母語（ドイツ語）に翻訳しようとしている。そこには、どんな困難があるのか、この困難はどういう意義を持ちうるのか、それを克服することは可能なのか、などの点を論議し、深める。

（3）フランス十九世紀における詩と翻訳の問題、さらには文学概念の変容をめぐる、湯浅、山田が中心となって究明していく。ボードレールがエドガー・ポーの作品を翻訳するとき、ヘルダーリンの場合と同じような困難に出会う。ポーの英語に固有な表現や語法、構文法、比喩法などを、できるかぎり忠実に尊重しつつ訳そうとするのだが、そうするとフランス語本来の語法、構文法から外れてしまう。翻訳の本質は、通常の翻訳概念とは異なっており、けっして内容および概念の面だけに関わることはありえない。必ずフォルムの側面、表現形態の面にも関わる。このことがなにを示しているのかを論究し、掘り下げる。

（4）ベケット、クンデラ、クツェーらを中心とする、現代文学における言語的な混ざり合い、相互の交渉、横断的性格などの問題点をめぐって、田尻、西中村が担当して研究を進める。なにゆえサミュエル・ベケットは母語である英語で戯曲を書くと同時に、ほとんど自己翻訳とも言える仕方でもフランス語でも書くのか。ベケットのなかには、いわゆる作家、創作者と翻訳者が同時に含まれ、共存しているのだろうか。一人の人間の内部で、異文化同士の対話や交流、あるいは「競い合い」が起こっているのではないだろうか。このような仮説を考えていく。

（5）マグレブの作家や、カリブ海のクレオール作家たちに関して、星埜が中心となって取り組む。彼らは、複数の言語と文化の接しあう地点に身を置く状況で文学創造を行ってきた。植民地主義の後遺症として、ある文化が支配的となり、他の文化が被支配的・従属的にされるような状況、伝統的・土着的・民族的な固有文化が、宗主国である外国の、異邦的で「先進的な」文化、ふつう「より普遍的で国際的である」とされる文化の浸透にさらされる状況のなかで、彼ら作家たちの多くは、土着語とフランス語（あるいは英語）の混成語であるクレオール語によって、かなりの作品を書いてきた。その場合、自分たちの「固有な」文化、歴史、風習・慣習、生活様式にできるかぎり根ざしつつ、それらを的

確に表現することのできるような語法、構文、言い回しを案出することを目指して、作品を制作してきたと思える。そこには大きな困難や苦悩があるが、しかしこういう困難はネガティブな面だけではなく、もしかしたらある新しい文化創造の可能性も含んでいるかもしれない。この点について、考察を進めていく。

(6) 研究課題の軸の一方である、「翻訳と文化横断性」を解明する理論的構築へ向けての作業も不断に行なう。

ジャック・デリダの翻訳をめぐる論考やその思想の核心については、湯浅を中心とし、山田・星埜が協力して精読を進める。アントワヌ・ベルマンの翻訳論に関しては、山田を中心として精髓の理解に努める。ベルマンが論じている対象は、ドイツ・ロマン派が基本となっているので、鍛冶・青木も加わって、フランス文学の側とドイツ文学の側とが適切に相互協力できるよう万全を期す。スピヴァクのポスト・コロニアル論に関しては、田尻を中心として研究を進める。

(7) 具体的な事例の検討と同時に、それらに関する書籍・資料の入手に意を尽くす。各事例（作家・作品、文化的状況・現象）に関して、国内および海外の研究者たちとの意見の交換や交流も活発に行い、そのための場として研究会、シンポジウム等を積極的に組織する

4. 研究成果

(1) 基本的な確認事項として、次の点を討議し、深化させた。まず翻訳とは「意味されたもの＝内容」を伝達することであるという常識を考え直すことである。意味内容の疎通は、翻訳の一部であるが、その総体ではない。翻訳は内容にも関わるが、むしろ「フォルムに関わる」(ベンヤミン) 運動過程であり、形態（主に言語のシニフィアンの側面）が他なる形態と関係することを通じて、その内容・概念的側面も疎通し、交流していく。この点を、西欧文学や思想の翻訳作品、また日本文学の西欧語への翻訳作品を多角的視点から精査することによって検討した。

(2) 第二に、以上のことから導かれる帰結として、当然ながら翻訳は言語の存在と作用に深く関わることを熟考しつつ、翻訳がなによりもまず言葉の特性をよく洞察するプロセスに立脚している点を明示するよう努めた。それも、原文の言語（他者の言語）だけでなく、自国語の文法、語彙、構文法などを深く探究することに拠ることを検証した。第三に、上記の議論を踏まえて、翻訳者（すなわち他なる言語・文化・習俗・宗教をよく読もう、理解しようとする者）の任務と課題はどういうものであるかを考察した。翻訳（他者との関わり）において最も重要なことは、

翻訳者がまず原作において、だがそのみならず自分が書いてゆくテキスト（翻訳作品）においても、言葉を記す仕方（フォルムの側面、シニフィアンの側面）と、記された内容（概念的側面、シニフィエの側面）とが絶対に分離できない仕方で結ばれていることに絶えず注目しつつ、そうした言語活動の特性を精密に分析し、理解することである。ただし、この理解は深めることはできるが、他者そのものに到達すること（完全な理解として完了すること）はありえないだろう。この点を論証することが、異文化との交渉・交流にとって最も肝要な核心となるだろう。

(3) 2007年12月12日、東大駒場キャンパスにおいて、「デリダのブランショ論〈生き延びる〉を読む」と題してシンポジウムを行なった。若森栄樹（独協大学）が基調報告をし、湯浅、田尻がコメンテーターとして、デリダの翻訳論、他なる言語・文化への関係のもつ問題系を多面的に討議した。60人を超える参加者も、活発に討論に加わり、密度の濃い研究集会となった。この討議の一部は、湯浅の著書『応答する呼びかけ』（未来社）のうちに反映されている。

(4) 2008年11月1日、田尻芳樹、山田広昭、星埜守之が中心となり、東大駒場キャンパスにて「モダニズム受容の諸相——『詩と詩論』とその周辺」というシンポジウムを開催した。第1部では、田尻が英文学のモダニズムの活発な受容者としての春山行夫を論じ、この詩人、批評家の英文学受容への貢献とその特質に光を当てた。湯浅、宮下は、モダニズムが日本近代文学の批評、翻訳理論にどのような影響を与えたかを討議した。第2部では、山田が、春山の編集していた雑誌『詩と詩論』ではヴァレリーの紹介に力が入れられていたことをふまえ、日本におけるヴァレリーの受容を再検討し、星野がやはり『詩と詩論』におけるシュールレアリズムの受容の特殊性を論じた。詩、批評、西欧文学の受容論、映画論など多様なジャンルを横断的に論じつつ、他文化の受容における翻訳の問題の考察を深めることができた。

(5) 2009年11月21日、東大駒場キャンパスで、「〈終わりなき対話〉およびそれ以降のブランショ」と題するシンポジウムを開催した。フランス現代思想・文学(デリダ、フーコー、ドゥルーズ、レヴィナスなど)に大きな影響を与えている批評家モーリス・ブランショをテーマにし、ブランショの文学論、言語論を検討する試みである。ブランショは、文学における言語の働き、その特徴を緻密に分析することを通して言語活動全般の理解を深めたのみならず、芸術作品（の起源）論や他者論、翻訳論の領域においてもハイデガー、レヴィナスなどの思想をさらに進展させている。このシンポジウムでは、ブランショの翻訳論を中心的に取

り上げた。翻訳において最も重要なことは、翻訳者が原作においても、自分が書いてゆく作品においても、言葉を記す仕方(フォルムの側面)と、記された内容(概念的側面)とが切り離せないかたちで結ばれていることを銘記し、そうした言語活動の特性を精密に理解することである。この根本思想を、多様な角度から検討し、多数の聴衆とも意見交換しつつ、議論を深めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 宮下志朗、作者の権利、読者の権利、そして複製の権利、『思想』、岩波書店、査読無、2009、通巻 1024 号、pp.147-156.
- ② 湯浅博雄、翻訳についての考察を深めるために——文学、思想・哲学の翻訳を問うことを通して、『思想』、岩波書店、査読無、2009、通巻 1018 号、pp.6-37.
- ③ Yoshiki Tajiri, “The Reception of Samuel Beckett in Japan”, *The International Reception of Samuel Beckett*, ed. Mark Nixon and Matthew Feldman, 2009, pp.147-162.
- ④ 宮下志朗、エミール・ゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』、千石・千葉編『名作は隠れている』、ミネルヴァ書房、査読無、2009、p.47-55、[分担執筆]
- ⑤ 湯浅博雄、モーリス・ブランショにおける言語と虚構、『現代詩手帖特集版、ブランショ生誕 100 年記念総特集』、査読無、2008、pp.271-301.
- ⑥ 湯浅博雄、〈大いなる拒否〉をめぐって——ブランショの論考解題、『現代詩手帖特集版、ブランショ生誕 100 年記念総特集』、査読無、2008、pp.145-155.
- ⑦ 山田広昭、アナキズムからファシズムへの変転：フランス・ドイツのゼネスト論の思想的系譜、『季刊 at (あっと)』第 14 号、太田出版、査読無、2008、pp.95-105.
- ⑧ 湯浅博雄、ルネ・シャールの詩作に溢れる生氣、『文学』、岩波書店、査読無、2007、第 8 巻第 1 号、pp.250-256.
- ⑨ 湯浅博雄、移ろいゆくものへの愛——ボードレール・阿部良雄・呼びかける言葉、『水声通信』、水声社、査読無、第 18 号、2007、pp.97-104.
- ⑩ Hiroaki Yamada, *Psychanalyse et narration : lecture d'une nouvelle de Tanizaki*, in *L'Autre de l'oeuvre*, Presses Universitaires de Vincennes, 2007, pp.343-350.
- ⑪ 星埜守之、テルケル／シュルレアリスム——ある前衛を巡って、『水声通信』、水声社、査読無、第 20 号、2007、pp.107-114.

[学会発表] (計 5 件)

- ① 宮下志朗、ルネサンスの笑いと叡智、日本笑い学会 15 周年記念研究会・招待講演、2009 年 11 月 21 日、明治大学.
- ② 山田広昭、戦前におけるヴァレリーの受容をめぐって、シンポジウム「モダニズム受容の諸相——『詩と詩論』とその周辺」、2008 年 11 月 1 日、東京大学駒場キャンパス・学際交流ホール.
- ③ 星埜守之、『詩と詩論』とシュルレアリスム、シンポジウム「モダニズム受容の諸相——『詩と詩論』とその周辺」、2008 年 11 月 1 日、東京大学駒場キャンパス・学際交流ホール.
- ④ 田尻芳樹、春山行夫と英文学のモダニズム、シンポジウム「モダニズム受容の諸相——『詩と詩論』とその周辺」、2008 年 11 月 1 日、東京大学駒場キャンパス・学際交流ホール.
- ⑤ 宮下志朗、人間存在の完全なかたちとはなにか、シンポジウム「古典の智慧・古典の愉しみ」、日仏会館ホール、2007 年 10 月 5 日.

[図書] (計 3 件)

- ① 湯浅博雄、『応答する呼びかけ——言葉の文学的な次元から他者関係の次元へ』、未来社、2009、246.
- ② 田尻芳樹、『ベケットとその仲間たち——クッツェーから埴谷雄高まで』、論創社、2009、288.
- ③ 宮下志朗、『本を読むデモクラシー』、刀水書房、2008、152.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯浅 博雄 (YUASA HIROO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30130842

(2) 研究分担者

宮下 志朗 (MIYASITA SIROO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90138610

(H20→H21：連携研究者)

西中村 浩 (NISHINAKAMURA HIROSI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：80218172

(H20→H21：連携研究者)

山田 広昭 (YAMADA HIROAKI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：40210471

(H20→H21：連携研究者)

青木 誠之 (AOKI MOTOYUKI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：20011356

(H20→H21：連携研究者)

鍛冶 哲郎 (KAJI TETUROO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30135818

(H20→H21：連携研究者)

田尻 芳樹 (TAJIRI YOSHIKI)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20251746

(H20→H21：連携研究者)

星埜 守之 (HOSHINO MORIYUKI)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：10238743

(H20→H21：連携研究者)

山本 史郎 (YAMAMOTO SHIROO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：00145765

(H20→H21：連携研究者)

(3) 連携研究者

()

研究者番号：